Mem. Fac. Fish. Kagoshima Univ.,
Vol. 39, pp. 201～223 (1990)

戦前・戦後の奄美南部三島における追込網漁業の変遷

市 川 英 雄*

Historical Review on the Progress of Drive-in-net Fisheries in the Southern Region of Amami Islands

Hideo Ichikawa

Keywords : Drive-in-net fisheries, Amami Islands, Itoman fishermen, commercial fisheries, fisheries development

Abstract

This paper describes to clear the characteristics and the progress of drive - in - net fisheries operated by "Itoman" fishermen in the southern region of Amami Islands, i. e., Yoron, Okierabu, and Tokunoshima Islands.

As a result of the policy of the Satsuma feudal clan of the Edo period for promoting sugar production, the industrial activities in Amami Islands were limited by sugar - cane farming. Commercial fisheries in this area started since the beginning of Meiji era and has been affected by two different types of fisheries, the skipjack - angling fisheries from the northern area (Japan proper), and the "Itoman" fisheries from the southern area (Okinawa Prefecture). Southern Amami area is not only near to the north of Okinawa Prefecture, but is also restricted by natural conditions for skipjack - angling fisheries.

Therefore, commercial fisheries is dominated by "Itoman" fisheries. The structure of "Itoman" fisheries in these islands is closely connected with the fishermen of Yoron Island.

The drive - in - net fisheries is managed by fishermen from "Itoman" fishing community and then operated by Yoron fishermen who had been trained by "Itoman" fishermen since the beginning of Showa era. Therefore, the drive-in-net fisheries in the southern region of Amami Islands is characterized by the changes of management from the type of apprentice system depending upon the laborers called "yatoinguwa" to the type of village community which depends upon the laborers with kinship and rural relationship in the fishing community.

*鹿児島大学水産学部水産経営経済学研究室 (Laboratory of Fisheries Management and Business, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 50–20 Shimoarata 4, Kagoshima 890, Japan)

Ⅰ 課　　題

奄美諸島の南部三島（与論島，沖永良部島，徳之島）は，地理的条件などからみて，沖縄との社会経済的諸関係は奄美大島などよりさらに深かったと考えられる[1]。これら南部三島では，自然条件の制約もあって，「本土」系譜のカツオ釣漁業の展開がみられず，したがって明治期以降の三島の漁業は糸満漁業の消長と深く関わっていたといえる。南部三島と糸満漁民との歴史的関係を裏付ける資料はほとんど皆無に等しいが，藩政期頃から，すでにこれら島嶼の海域が，鱶鰭，鯣，海参など中国貿易品を生産する糸満漁民によって，漁場として利用されていたと考えて間違いないだろう[2]。その後，明治期に入り「琉球処分」などを契機に衰退した日中貿易の影響をうけて，久高島民の漁業主業化と域外出漁の進展[3]や糸満漁民の中国貿易品から欧米で需要が増大した貝ボタン原料貝殻などへの生産品の重点移行・漁種転換が進む一方，1900年代に入り，糸満漁民の一定の資本蓄積と農漁民層の分化・分解を基盤にして，血族集団を中核とする「親方制模合経営」の追込網（廻高網）漁業に重点をおいた糸満漁民の県内外への出漁が一般化する[4]。こうした糸満漁業・漁民の変遷の中で，南部三島への糸満漁民の出漁の形態も，季節的通漁形態から移住形態へと変質し，島嶼による差はあるが，明治末期から大正初期にかけて定住化の傾向を強めることになる。しかし，南部三島の糸満漁業の展開は奄美大島のそれとはかなり異なった特徴を示している。

本稿は，すでに公刊された「科研費」の総合研究の成果報告[5]をもとに，筆者の担当した一部を，その後，補充調査などにより加筆・訂正したものである。その具体的内容は，戦前・戦後の南部三島における追込漁業の特徴の総括と，可能な限り明治末期以降の網組の実態およびその変遷を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 南部三島の追込網漁業の特徴

最初に南部三島の戦前・戦後の追込網漁業について，その主要な特徴を要約すれば，次のとおりである。まず第1は，追込網組の責任者や構成員の出身地の特徴があげられる。すなわち，これら三島のうち，「雇い子」の主要給源の1つであった与論島についてはいうまでもないが，沖永良部島，徳之島の両島においても，与論島出身の糸満系漁民の勢力が絶大であり，それ以外の糸満系漁民による追込網組は出現しなかった。網組は，島嶼ごとに時期的・形態的に若干の差異は示すが，三島とも糸満出身の漁民から与論島出身糸満系漁民へ代替・移行が進み，1930年代に入り，かれらの組織する網組が圧倒的優勢を示すようになってくる。第2に，与論島出身の糸満系漁民によって組織された網組の場合，同島の独自の村落共同体などを基底にした血縁地縁関係を基盤とする労働力の調達を基本とするとともに，トムヌイ（船頭）層自体が年季明け「雇い子」である場合が多く，かれらの資本蓄積の限界などに制約されて，網組の「雇い子」数は少なく，代分けも相対的に平等化，均一化していることが指摘される。一般に糸満出身の漁民によって組織化された網組の場合は，血縁集団を中核にした責任者・トムヌイとかれらに従属する「雇い子」によって網組編成が行われており，そこでは「親方制経営」としての性格が強く，労働力の緊縛や代分けの格差も大きい。こうし

た網組の性格・特質は，南部三島においても，その例外ではない。これに対して与論島出身者の網組は，「親方制経営」の性格よりも小生産者の協働による「共同経営」的性格が強く，労働力の緊縛も弱い。したがって時代的な背景もあって，労働力移動が著しいのである。第3の特徴としては，南部三島の与論島出身者による網組は，利用漁場の地域移動や網組規模の変動がかなり激しいことが指摘できる。戦前・戦後の網組は，基本的には島嶼ごとに大まかな棲み分けが認められるが，労働力給源である与論島では，膨大な潜在的過剰人口の存在と低所得農漁民層が支配的な小島に起因するきびしい市場的制約によって網組やそれを構成する漁夫は，比較的自由に母村の与論島を基点により有利な漁場・市場，あるいは網組などを求めて近接する沖永良部や徳之島などの間をかなり頻繁に移動・往来し，激しい流動性を示している。そして，こうした事情は，与論島をはじめこれら三島における糸満系漁民による網組の消長を複雑にし，その規模や地域別把握を困難にする要因ともなっているといえよう。第4に販売・流通の面においても，一般に網組所属の漁夫が販売にも参加するといった特徴がみられる。漁獲物の販売が，責任者・トムヌイの妻を中心にした網組専属の行商に依存していることは奄美大島などと変わりはないが，一般にこれら行商販売を担当する女性数が少なく，それを補強するため，多くの場合網組に所属する漁夫が，操業後に水揚げした漁獲物を手分けして自ら行商販売を行っている。これら三島における漁獲物の販売条件はかなりきびしく，行商収入も相対的に低く，行商を行っていた糸満女性らからみれば，必ずしも魅力的な島嶼ではなかったと推断される[6)]。

つぎに網組の島嶼別特徴についてみれば，次のとおりである。まず第1の特徴は，前述した糸満出身漁民から与論島出身糸満系漁民への網組ないし網組責任者の代替・変化が島嶼別にかなり時期的差異を示すことである。南部三島における両漁民の組織する網組の関係は，「雇い子」の主要給源地となっていた与論島を基点に両者の力関係が同島との距離に大きく関連しており，両漁民が組織する網組の代替・変化の時期は，与論島で早く徳之島では遅い。与論島ではすでに大正中期（1910年代後半）頃に季節的に通漁していた糸満出身者による網組は姿を消してしまったといわれ，定住した糸満出身漁民もいないことから，今日では同島でかれらの網組の痕跡を確認することすら極めて困難となっている。これに対して徳之島では，昭和初期（1920年代後半）頃までは糸満出身漁民の組織する網組の独擅場となっており，与論島出身の糸満系漁民が網組を組織するのは1930年頃からである。しかも，両者による網組は，その後拮抗して奄美の「本土復帰」頃まで併存しているのである。また，地理的に両島のほぼ中間に位置する沖永良部島では，1930年代以降，網組が糸満出身漁民から与論島出身糸満系漁民へ代替・移行し，第2次大戦の頃から後者の組織する数統の網組だけが存続することになっている。第2に戦前期の網組規模についてみれば，次のような島嶼ごとの特徴が指摘できる。南部三島の網組は利用漁場や対象市場の広狭によって2つのタイプに類型化できるが，まず網組の主流をなす島内の局地的漁場・市場だけに依存する網組については，産業立地や人口集積などを一義的に規定している島嶼の大きさとほぼ比例しているといえる。すなわち，戦前期には各島に3－4統の網組が棲み分け操業しているが，奄美諸島の中で大島本島に次ぐ広さをもつ徳之島では，戦前の網組はその規模が相対的に大きく，南部三島で最小の島嶼である与論島の場合は，きびしい市場条件などに制約されて，網組の規模が小さい。また沖永良部島の網組は，両者のほぼ中間的な規模を示している。こうしたそれぞ

れ各島内の漁場や市場に依存する網組のほかに，追込網の主要労働力給源となっていた与論島では「本土」や薩南諸島など島外出漁を主体にした網組が併存している。このタイプの網組の特徴としては，（1）一般に秋―春期を漁期にして網組編成を行う島内操業型の網組と異なり，春―秋期を主な漁期にしていること，（2）主要漁場は高知，愛媛，島根などの県外漁場であり，秋―春期には網組を再編して与論島を含む薩南諸島など県内漁場でも操業するといった広域的な漁場の利用を行っていること，（3）漁獲物の市場は関西市場や鹿児島市場など都市市場に目標を定めて出荷を行っていること，また網組の規模についても，県外出漁する春―秋期には徳之島のそれを上回るほど大型のものであることあげられる。与論島において，こうした島外出漁型の網組が成立するのは，1930年頃であり，その代表的なものとして，若松組があげられる。かかる網組が形成された要因としては，追込網漁業技術そのものを修得したかなりの熟練労働力の存在と昭和恐慌下で地域産業の不振にともなう膨大な潜在的過剰人口の堆積を基盤に，「本土」出漁の網組へ参加しトムヌイなどに昇格した一部の糸満系漁民によるある程度の資本蓄積の進展と共同体的村落構造を基盤にした血縁地縁的労働力の調達機構が効果的に作用したことが考えられる。すなわち，同島が「雇い子」の主要給源地であったことから，大正末期から昭和初期にかけて年季明けし独り立ちした多数の追込網漁業技術を身につけた熟練労働力が養成されたにもかかわれず，漁場や市場面できびしい制約をうける島内操業型の小規模な追込網組や個別的，散発的な労働力移動・雇用だけではかれらを吸収し得なかったこと，「本土」出漁の網組の場合，漁期が春―秋期で甘蔗収穫期と時期的にずれていて労働力の競合が回避できるだけでなく，相対的に高収入も期待できたこと，さらに，こうした諸条件を前提に与論独自の村落共同体を基盤にした血縁地縁関係にもとづく労働力の調達と網組編成が可能であったことが，かかる県外出漁型の大型網組の存立条件となっていたといえる。第3に，漁獲物の販売面についても，与論島は他の二島とは異なる特徴を示している。それは，流通機構の担い手と漁獲物そのものの商品としての性格に端的に現れている。たとえば，前者については，糸満出身漁民が組織した網組が季節通漁していた当時はともあれ，与論島には行商を行う糸満女性の定着はみられず，漁獲物の販売は，大正中期以降，もっぱら地元女性（網組構成員の妻と若干の専業的な小売行商を行う女性が主体）と網組に所属する漁夫によって担われていた。また，後者については，網組の経営自体が他の二島に比べてかなり生業的性格をもっており，漁獲物は商品として販売されると同時に，売れ残ったものは網組構成員の家計を補充する自給用として現物配当に回されているのである[7]。

さて，以上述べたように，奄美南部三島における追込網漁業の主要な地域的特質の一つは，糸満出身の漁民の網組から，これら三島の一部を構成し追込網労働力の主要給源地となっていた与論島の糸満系漁民の網組へ移行・継承されることである。したがって，これら三島における追込網漁業は，単に三島がおかれた自然的・地理的条件や与論島以外の二島（沖永良部島，徳之島）のもつ社会経済的条件によって特徴づけられているだけでなく与論島自体の独自の村落社会や産業・経済の構造的特質と深い関わりをもって展開してきたといえる。そこでつぎに，これら三島における戦前・戦後の追込網組の変遷とその特質を，網組組織の主体的条件である漁民の変容・代替を基本視点に据え，島嶼別に明らかにしておこう。

Ⅲ　追込網漁業の変遷

1．戦前期

奄美諸島における戦前期の追込網漁業の変遷は，網組の組織主体とその変容からみれば，次のような3つの時期に大別できる。すなわち，第1期は糸満出身漁民の隆盛期（明治末期から大正末期頃まで），第2期は，糸満，糸満系漁民による網組の拮抗期（昭和初期頃から太平洋戦争前まで），第3期は網組の主体性喪失期（太平洋戦争勃発より敗戦まで），がそれである。第1期は，明治末期（1900年代初期）より追込網漁業の著しい発展と利用漁場の拡大過程の中で奄美諸島などへ季節通漁を行っていた糸満出身漁民は，出漁形態を移住・定着の形態へと変化させ，ほとんど未利用のままとなっていた奄美諸島の追込網漁場を独占的に利用するようになる時期である。追込網漁業が，従来糸満出身漁民が生産対象にしていた鱶鰭，鯣，海参，貝殻，海藻類などいわば加工型水産商品の生産とは質的に異なる鮮魚供給を目的としていることから，これら漁民の定住する背景には，奄美諸島における一定の地域経済の発展にともなう島民所得の向上や「本土」との頻繁な交易・人的交流などにともなう食生活の「本土」化により鮮魚に対する消費需要の増加があったことは，いうまでもない。各島嶼・地域による差異はあるが，日清・日露戦争後の明治末期頃より，黒糖，大島紬，カツオ節といった奄美の島外出荷向け三大商品の生産は著しい発展をとげ，第1次大戦後の大正中期頃には名瀬をはじめ各島嶼の商業・交易の中心地などでは，一時的とはいえ，好況の影響をうけて，かなりの経済的繁栄をみるにいたっている。こうした地域の産業・経済の発展は，食文化を異にしていた奄美諸島における鮮魚消費を増大させ，それが追込網漁業の重要な存立基盤となったのである。第2期は，大正中期（1910年代後半）頃より年季の明けた「雇い子」の独立と網組の組織化によって糸満系漁民の網組が成立し，さらに昭和初期（1930年）頃よりかれらによる網組の分立傾向が強まり，網組数が増加することによって，両漁民の網組および網組相互の競争や対抗関係をつよめながら，昭和期に入り網組の代替，解散・消滅などによる再編成が進行している。黒糖，大島紬，カツオ節，花ユリ球根などの特産品によって島の経済が支えられていた奄美諸島においては，第1次大戦後の経済不況やそれに続く昭和恐慌によってうけた経済的打撃は深刻で，それがこの期の網組の再編成に大きな影響をおよぼしたことも無視できない。第3期は，太平洋戦争の勃発を契機に強化された戦時体制のもとで，20代のトムヌイなど中核的労働力の徴兵による激減とともに，従来のように自由な網組経営のもっていた主体的条件は喪失してしまう。つまり，有力な網組はそのほとんどが，奄美諸島に駐屯する数千人の陸海軍部隊に対する食糧供給のための組織として動員され，その体制下に組み込まれなかった多くの網組は，漁業資材の調達などが困難となる中でほとんど休業・解散してしまっている。大戦末期には，戦場と化した沖縄本島に近接していることから，戦争による影響も大きく，網組責任者・漁夫の空襲などによる戦争被害も発生しているのである。

ところで，南部三島における戦前期の追込網漁業の変遷を，すでに述べた網組の組織主体とその変容といった観点からみれば，総じて先駆的な糸満出身漁民の網組と「雇い子」の主要給源地であった与論島の糸満系漁民が組織する後発的網組との対抗関係および後者の前者

に対する代替・移行の過程として特徴づけられることは，すでに指摘したとおりである。しかし，こうした両漁民の網組の諸関係やその代替の時期などについては，南部三島の中でも各島嶼のおかれた自然的，社会経済的条件とそれを基盤に歴史的に形成されてきた両漁民の力関係の相違などによって，島嶼別にかなり大きな差異を示している。そこで，ここでは明治期以降，島嶼ごとに棲み分けた追込網組について，その具体的な推移・変化を島嶼別に明らかにすることによって，戦前期のこれら三島における追込網漁業の変遷とその地域的特徴を明確にしてみたい。

なお，戦前期の奄美諸島における糸満漁業については，文献・資料による裏付けがほとんど困難である。南部三島の場合も，その例外ではない。以下では，すでに述べた「科研費」の成果報告後に補充調査を行った聞取り調査などをもとに若干の加筆・訂正を行ったものである。各島嶼ともなお若干不明確な点は残るが，南部三島における戦前の主要な追込網組は表1に示すとおりである。以下，これらの網組の実態と変遷について，概括してみよう。

1）与論島

奄美諸島の最南端に位置し沖縄諸島に近接する小島の与論島では，奄美諸島の中でも歴史的に深く沖縄と関わりながら，その社会，経済，文化などが形成されてきたとみられる。それは，同島の社会が独自の共同体的な殻をもちながらも，沖縄との親近感や「糸満売り」に対する抵抗感の少なさなどによっても端的に示されている。そして，こうした与論島社会のもつ沖縄との独自の歴史的諸関係が，明治期以降，日本の資本主義経済の発展にともない，辺境離島として経済的窮状の度合を強めてくる与論島をして，同島出身の糸満系漁民の著しい発展を促す重要な社会的基層をなしているといえよう[8)]。カツオ釣り漁業の展開をみなかった奄美南部三島では，与論島出身の糸満系漁民が，昭和初期以降，糸満出身の漁民に替わって追込網（アゲヤー）を中心とした糸満漁業の生産力の新しい担い手として登場し，ほとんど漁業らしい漁業がなかったこれらの島嶼の地域産業の展開に重要な役割を果たしてきたのである。

ところで，この与論島の追込網組の特徴をあげれば，第1に，島嶼の自然的，社会経済的条件によって市場条件などがきびしい制約をうけているにもかかわらず，戦前の網組数は，沖永良部島，徳之島のそれを凌駕するほど数が多いことである。これは，「雇い子」の主要給源地などとして島内に膨大な潜在的過剰人口が存在し，それを基盤に，ここで島外出漁の網組なども陣容を整え，この島が，名瀬とともに，島外出漁の追込網にとって重要な網組編成の基点となっていたことに起因するものである。第2に，島内操業の網組についてみれば，一般に網組規模が小さく，しかも甘蔗作農業を併営する半農半漁的な農漁家労働力へ全面的に依存し，盛漁期と甘蔗収穫期とが重複することから，労働力の競合が激しく，漁期中の労働力変動による操業上の制約もきびしいこと。第3に，すでに指摘したように，漁獲物の販売・流通面での特徴や漁獲物自体の商品としての性格にも大きな特徴がみられることである。まず，一般に糸満女性が担当している漁獲物の販売・流通についてみれば与論島の場合，地元女性が完全に彼女らに替わってその機能を担当している。また漁獲物そのものについてみれば，それがかなり現物配当の形で分配されており，これは，市場条件の制約によるだけでなく，労働力基盤が生業的な零細農業を併営する農漁家労働力に依存していることから，

表1　戦前の奄美南部三島の追込網組

島名	網組名	存続期間	網組規模	出身地		漁場－水揚地	備考
				責任者	漁夫		
与論島	徳田組	1915，6 ～1942，3	漁夫17,8～20人 サバニ2～3隻	立長	島内	島内一円－{茶花 古里 立長}	
	永岡組	1924，5 ～1943頃	漁夫　20数人 サバニ3～4隻	茶花	同上	同上－同上	
	亀組	1920年代初 ～1942，3	漁夫　20～25人 サバニ4～5隻	麦屋 西区	同上	与論－大金久 沖永良部島－{和泊 小米}	
	里組	1925頃 ～1942，3	漁夫17,8～20人 サバニ2～3隻	同上	同上	島内一円－{茶花 古里 麦屋}	
	若松組	1931，2 ～1944	漁夫　38～43人 運搬船2～4隻 サバニ6～7隻	麦屋 東区	同上	高知，愛媛 －関西，中国 沖永良部島 －島内各地	運搬船は出漁先などでチャーターする。大城亀組（沖の島出漁）より独立
	山下組	1934，5 ～1942，3	漁夫17,8～20人 サバニ2～3隻	同上	同上	島内一円－{茶花 古里 麦屋}	
	坂元組	1934，5 ～1942，3	漁夫　30～40人 サバニ5～6隻	古里	同上	トカラ列島－名瀬 与論－茶花，古里	
	杉組	1940頃 ～1943	漁夫　20人程度 サバニ4～5隻	麦屋 東区	同上	奄美大島－名瀬 徳之島－亀津 沖永良部－和泊	若松組より独立，名瀬を主要基地にする
沖永良部島	長屋組 （長嶺組）	1912，3 ～1936，7	漁夫　24～25人 サバニ4～5隻	糸満	与論 糸満	和泊町 中心に 島内一円}－{和泊 伊延 知名}	
	トーミシンカ	1920年代 ～1942，3	漁夫　20～25人 サバニ4～5隻	糸満	与論 糸満	同上－{和泊 知名}	
	ユーザンメニンジュ	1935，6 ～1942,3	漁夫　20人程度 サバニ　4隻	糸満	糸満 与論	知名町 中心－{和泊 知名}	トーミシンカより独立
	玉栄組 （長屋組）	1937，8 ～1941頃	漁夫　17～18人 サバニ3～4隻	与論 （立長）	与論	和泊町 中心に 島内一円}－{和泊 伊延 知名}	「長屋組」の2代目
	吉田組 （長屋組）	1941頃 ～1965	漁夫　17～18人 サバニ3～4隻	与論 （立長）	与論	同上－同上	「長屋組」の3代目
	向井組	1941，2 ～1953	漁夫17,8～20人 サバニ3～4隻	与論 （立長）	与論	同上－同上	トーミシンカ，長屋組などを経て独立
	奥組	1941頃 ～1945	漁夫　24～25人 サバニ　5隻	与論 （麦屋）	与論	同上－同上	前田組（名瀬）より独立
徳之島	カマスー組 （大城組）	1907頃 ～1942，3	漁夫　70人程度 サバニ　10隻	糸満	国頭 中頭 糸満	島内一円 －島内各地	山部落を根拠に「西方」「南方」の2組に分割して操業
	宮城組 （中ン屋組）	1920年代初 ～1941頃	漁夫　40人前後 サバニ6～7隻	糸満	国頭 与論 松原	松原（夏） 面縄 亀津（冬）}同左	網組規模はトビウオ追込網，アゲヤーの場合は規模が小さい
	永井組	1930頃 ～1965頃	漁夫　30～40人 サバニ4～5隻	与論 （麦屋）	与論	島の南東部 中心－亀津 中心	
	奥村組	1930頃 ～1945	漁夫　40人程度 サバニ5～6隻	与論 （麦屋）	与論	島内一円 －島内各地	亀津を根拠にする組と全島廻りの組の2組に分割して操業

（注）1．聞取り調査による。
　　2．網組規模は通常の操業が行われた1930～1940年頃のもの。

漁獲物自体が，かれらにとっては自給的，家計補充的性格を強くもつ必然性をもっていたのである。

さて，与論島における追込網の創業の経緯は必ずしも明らかではないが，多くの地域にみられるように，当初は糸満出身漁民の季節通漁の形態から始まるとみられる。島自体が小さく，市場的にもきびしい限界があることから，移住・定着した網組はなく，大正中期頃に地元の徳田組が組織されて以降，糸満より季節通漁していた網組についても，ほとんど来島しなくなったといわれる[9]。したがって，この島の網組は，大正中期以降，年季明けして帰島した同島出身の「雇い子」など糸満系漁民が組織した網組のみであり，戦前期は主要な網組だけでも８統を数える。徳田組[10]をはじめ，永岡組，亀組，里組，若松組，山下組，坂元組，杉組がそれであり，大正末期から昭和初期にかけて組織されたものが多い。地域的には，糸満の漁民との関係がもっとも古く，強かったとみられる麦屋地区の網組が，およそ３分の２を占めている。また，これらの網組は，スズメダイ（「ヒキ」と称する）などを主対象にして島内操業のみを行う比較的小規模なものと，島内外の広域漁場でイサキ，タカサゴなどを主対象にした本格的なアゲヤー[11]を行う網組規模の大きいものとに大別でき，さらに後者では，薩南諸島の漁場を広域的に操業するものと県外出漁を主体にしたものとに分けられる。「ヒキ網」を主体にした島内操業のみを行う網組は，一般にその規模が小さく，サバニ２－３隻，漁夫17，８人－20人程度で，これには徳田組，永岡組，里組，山下組といった半数の網組が属している。これに対し，与論島内だけでなく，トカラ列島付近以南の薩南諸島の漁場をかなり広域的に利用する網組の場合は，その規模がやや大きく，サバニ４－５隻，漁夫20－30人で，これには亀組，坂元組，杉組が属する。これらの網組では，とくに近接する沖永良部島との関係が強いのも大きな特徴である。最後に高知，愛媛，島根など県外漁場への出漁を中心にしていた若松組の場合，網組規模は，島内操業だけの網組に比べて約２倍の規模にあたるサバニ６－７隻，漁夫40人前後で，そのほかに出漁先などで２－４隻の運搬船（活魚と鮮魚で出荷）をチャーターしている[12]。漁期は，奄美諸島の場合，秋―春期，トカラ列島以北の地域では春―秋期である。たとえば，県外出漁を主体にした若松組の場合は，旧正月後に網組を編成し，２月下旬に定期船などを利用して沖の島（高知県）へ出漁，同島を根拠地にして島の周辺漁場で操業する一方，宿毛湾周辺から足摺岬付近までの高知県南西域沿岸や愛媛県南宇和の内海周辺域の漁場を利用し，旧暦８月十五夜まで操業して帰島し，その後網組を再編成して，11月から12月中頃まで沖永良部島へ再出漁している。与論島でも正月前などには操業しているが，その主体は「オカズとり」（網組構成員の自給）であったといわれる。こうした若松組の網組設立当初の漁場利用の基本的形態は，その後資源の減少や地元漁業との関係などで変容し，1930年代後半頃より利用漁場は一段と拡大する。島根県隠岐島（前島の海士町菱浦を根拠地に操業），種子・屋久，三島，十島，五島列島（福江島の戸岐を根拠にコウライ瀬などで操業），さらに北陸の福井，石川，新潟（佐渡島）などへの出漁が，それである。しかし，これらの漁場は，そのほとんどが１漁期の数カ月以内といった短期間の利用で，しかも不安定・不確実な出漁であったとみられる[13]。ともあれ，この若松組については，甘蔗収穫期にあたる冬期の沖永良部島出漁では，網組規模が，現地調達の漁夫を含め20－30人，サバニ４－５隻に縮小するとはいえ，周年追込網漁を行っているところに大きな特徴がある。ちなみに，島内操業だけの網組については，甘蔗収穫労働との関

係で漁夫数の変動が激しく，追込網の操業自体が不安定であるだけでなく，夏期を中心にかなり長期に個別漁業を営むことから，その操業日数も一般に短いのである。

つぎに，網組の変遷について簡単にふれておく。戦前期の与論島の網組は，そのほとんどが独り立ちした「雇い子」がそのまま帰島して組織したものか，あるいは独り立ち後，糸満の網組などの漁夫を経て帰島後組織したものかが主流で，同島の網組のトムヌイなどを経て分離・独立したのは杉組だけである。しかも網組責任者の多くが死亡していることから，大部分の網組の設立経緯は明らかではない。いま，その経緯がわかるいくつかの網組についてみれば，次のとおりである。

まず，小学校卒業後八重山でカツオ釣りやその餌漁業，採貝，アゲヤーなどの技術を修得して1924年に帰島した茶花出身の永岡玉置[14]が責任者となって組織した永岡組は，秋―春期（11―3月）にヒキ（スズメダイ），ウルメ（タカサゴ）を対象にしたアゲヤーを営み，その閑漁期の春―秋期には，サバニ1隻で4人が従事する「イキマー」漁業（モジ網でとったヒキなどを活餌に使用してカツオ，シビを釣る）を行っている。追込網の網組規模は，サバニ3－4隻，漁夫20数人で，与論島周辺漁場で操業している。網組専属の魚行商の女性は6人程度で，1斤（600g）当たり2銭の口銭をとって販売に当たるが，1人で1日に30－60斤（18－36kg）が取扱い限度であるため，300斤（180kg）位の漁獲があると，網組の男性が2人で1組になり売り歩いた。茶花地区は与論島最大の消費地であり，網組規模があまり大きくなく，大雑把な生産調整（1日の漁獲量を200斤程度に制限）もしていたので，売れ残ることは比較的少なかったが，売れ残った場合は網組で現物として配当した。代分けは，袋網3人前，スデ（袖）網2つ（ケタ）で3分（合計8ケタ使用し合わせて1.2人前），漁船1人前，従事者は全員1人前で働きのいい網組員には責任者がスデ網を持たせた。この結果，袋網とサバニを提供する責任者は5人前，トムヌイ（船頭）2.3人前，一般漁夫1人前で，同一集落の血縁地縁関係を基盤にして網組編成を行っている与論島の場合，代分けによる分配の格差は糸満出身者の組織した網組に比べてかなり縮小している。漁船の共有関係などがあれば，その格差はさらに縮小する。ところで，この永岡組は，1940年代に入り労働力の減少などによって「イキマー」漁業へ重点を移し，1943，4年頃には休業・解散している。

つぎに，若松3兄弟（内渡美，北川，内中）を中核に与論島出身糸満系漁民などで組織された同島で最大の網組である若松組については，どうか。3兄弟はいずれも「雇い子」経験をもち，年季明け後，高知県沖の島，島根県隠岐島などへ出漁していた大城組に相次いで漁夫として参加，その後トムヌイに昇格した長男内渡美が責任者となって，1930年頃に大城組[15]より分離して新しく若松組を組織している。若松組が分離した経緯は必ずしも明確ではないが，分立当初，内渡美のサバニに乗り組んでいた血縁地縁関係をもつ与論島出身者6人は，沖の島でテングサとりなどをしたといわれる。2年後，網組を編成し沖の島へ出漁，大城組と拮抗しながら数年後には主導権を握るにいたっている。若松組の最盛期は，1930年代の約10年間であり，当時の網組規模は，前述したとおりである。代分けは，袋網3人前，カキ網（ソデ網と同じ）0.5人前（9ヒロ×7ヒロを2ケタで），イケ網（活魚出荷を行うため蓄養網生簀を使用）0.5人前，漁船1人前，従事者0.5－1人前で，責任者は5人前，船頭（トムヌイ）は2.5人前であった。この網組の特徴は，イケ網の使用と，大型の網組にもかかわらず，与論島の網組と共通する労働力編成を行い「雇い子」が全くいなく，責任者・船

頭・漁夫の分配幅が比較的平準化していることである。糸満をはじめ網組が「雇い子」を基盤にした「親方制経営」であるのに対し，与論島の網組は独自の血縁地縁関係を基盤にした「共同体的経営」とでもいえる特徴をもっているのである。ところで，この若松組も戦時体制の強化の中で操業が制約されるとともに，網組責任者内渡美の召集や所有母船の戦禍などが重なり，1944年に網組は解散してしまっている。

なお，若松組の場合，漁場利用，漁獲物の市場出荷，仕込資金の調達などをめぐり商人資本・地元有力者などと深い関わりをもっているとみられるが，それらの全容については必ずしも明らかではない。残された課題である。

以上の網組のほか，島内操業型の網組については，一般に生業的な性格を強くもっており，戦時下の食糧難の中で操業を続けるが，大戦末期の頻繁な空襲などにより，与論島のほとんどの網組は，1943，4年には休業・解散してしまい，その半数は戦後復活しなかったのである。

2）沖永良部島

この島についても，明治期から大正期にかけ短期の季節通漁を行っていた糸満の追込網組については，ほとんど不明である。しかし，与論島とは異なり糸満の漁民による網組が戦前期まで存在しており，とくに昭和10年（1935）頃までは，この島の追込漁場をほとんど独占的に利用してきた。大正初期に来島し和泊の手々知名の浜辺（シマミシドウの西隣り）に40坪ほどの長屋を造り，それを根拠地にして追込漁を行った糸満出身の長嶺三良（「サンダースー」または「カンプーメー」と呼ばれる）が組織した長屋組と昭和5年（1930）頃に糸満出身の「トーミウンメー」または「トーミハンダウンメー」によって組織された「トーミシンカ」の2つの網組[16]が，それである。両網組は，いずれも和泊に根拠地をおき，昭和初期頃より5－6年間は相互に競争し鎬を削っていた。これら網組の概要と変遷をみれば，次のとおりである。

まず，長屋組[17]については，沖永良部に定住して操業した最初の組だといわれ，アゲヤーのほか島の北西部の沖泊付近にはナガィユベーの漁場を保有していた。網組規模はサバニ4－5隻，漁夫24－25人で，ウルメ（タカサゴ），ヒキ（スズメダイ）を対象に10－5月を漁期にして操業した。網組編成は責任者とトムヌイ（息子2人）のほか数人を除けば，構成員の多くが与論島出身者で占められていた。また，1930年代中頃の網組は，構成員の大部分が1人前の漁夫で構成されており，それ以下の配当をうけるものは，4－5人程度であった。漁場は，和泊町周辺の沿岸域が中心で，潮流が早い知名町小米付近より以西の漁場ではあまり操業しなかった。操業時の主要根拠地は和泊港であり，風向などの関係で北西海岸で操業する場合には，南東部の和泊港から数名の漁夫によってサバニを担いで陸路にて伊延へ移動させた。また小屋がけで泊り込みの出漁をしたのは，島の北西部海岸にある知名町沖泊だけである。沖泊付近はムロアジの好漁場であり，5月頃から1ヵ月位は，ここの海岸近くに小屋をつくり仮住いにして操業している。漁獲物の販売は，網組に所属する12－13人の糸満出身の女性などによって，各集落をまわり販売されている。ところで，この長屋組については，1920年代終わり頃には与論島立長出身の玉栄栄富が漁労の責任者となっており，網組責任者の「サンダースー」ら糸満の漁民は，ハーレー（旧暦5月4日）には糸満へ帰郷し，漁期の始まる前に来島していた。網組を解散する夏場（6－9月）には，島に定住する与論島出身

のトムヌイらを中心にして，アージン（ハタ類）など瀬魚類を対象にした「イケマー」漁業（活餌を使用した一本釣り）など個別漁業を行っており，網組の主導権は周年同島に定住して漁業を営む与論島出身の糸満系漁民へ漸次移行していく。そして，この網組は，1937，8年に漁労の責任者であった玉栄栄富に譲渡・継承されている。

一方，トーミシンカ[18]については，後発網組であるため部落との入漁契約が必要なナガィユベー漁場は保有していないが，網組の規模は，長屋組とほぼ同じで，サバニ5隻，漁夫24－25人である。トムヌイは糸満出身者と沖縄出身の糸満系漁民が主体で，漁夫は糸満など沖縄出身者のほか与論島出身者がかなり多かった。アゲヤーの漁期，漁場，操業形態などは長屋組と基本的に同じであり，網組責任者の「ハンダウンメー」らはハーレーにはほとんどが帰郷し，6－9月には網組を解散している。しかし，漁労責任者の金城治造（ジロアッピー）は，弟の次郎らとともに島内に留まり，与論島出身の糸満系漁民などと同様に，個別漁業（「イキマー」漁業）に従事している。ところで，このトーミシンカは1935年頃までは長屋組と相互に鎬を削るほどの勢力であったが，1930年代後半に漁労責任者の治造が網組を新たに組織することによって消滅する。新たに組織された網組は，治造の屋号をとり「ユーザンメニンジュ」と呼ばれたが，網組規模はやや縮小しており，根拠地も知名町住吉付近に移している。しかし，このユーザンメニンジュも，第2次大戦が激化する1942，3年頃には網組が解散して糸満出身の漁民が組織する網組は全く姿を消している。

さて，こうした糸満の漁民が責任者となって組織された網組の解散・減少にともない，それに代替して追込網漁業の経営を担っていくのが，与論島出身の糸満系漁民である。沖縄出身のトムヌイだけで組織されていたトーミシンカ，ユーザンメニンジュの場合は，網組の解散によってそれを継承する与論島出身者による網組は出現しなかったが，長屋組については，前述したように，与論島出身糸満系漁民の玉栄栄富によって継承されている。玉栄組は，その後網組責任者の栄富が身体的に脆弱であったことなどから，わずか3年間操業しただけで，かれとは血縁関係にあたり同網組のトムヌイをしていた同郷出身の糸満系漁民，吉田富松[19]によって吉田組に再編され，継承されることになる。両網組は，基本的には長屋組の経営を踏襲するが，いずれも網組規模がそれより小型化しており，しかも漁期は大幅に延びているといった特徴が指摘できる。すなわち，網組規模は，サバニ3隻，漁夫17－18人程度で，ヒキ（スズメダイ），ウルメ（タカサゴ）を主対象にしたアゲヤーとムロアジを対象にした「ムロ追込網」，「待網」（ナガィユベー）[20]とを併営している。また漁期についてみれば，吉田組の場合は周年追込網漁を行い，とくに網組を解散することによって個別漁業へ切り替えてはいない。網組規模が縮小した要因には，戦時体制の強化による若年労働力の減少とともに，母村与論島における網組の乱立による追込網労働力の需給関係の変化，農漁結合の労働力を基盤とするため漁期が重複する甘蔗収穫労働などとの労働力競合，与論島独自の血縁地縁関係に基づく村落共同体を基盤にした労働力調達のあり方と「親方制経営」の変容などがあげられよう。また，網組の操業期間の延長については，網組責任者の糸満系漁民への代替とかれらのこの島への定住化および，網組の労働力基盤の変容と漁民の性格的変化とに深い関わりをもっているといえよう。ところで，この吉田組は，その後戦争の激化により操業が困難となり，1943，4年に網組は実質的に解散状態となっている。

さて，以上のような長屋組の系譜をひく網組のほかに，戦前の沖永良部島では戦時体制に

入り与論島出身糸満系漁民による２つの網組が誕生している。１つは奥組であり，いま１つは向井組である。まず，奥組についてみれば，網組責任者の奥内村は，名瀬を根拠に五島出漁などをしていた前田組（網組責任者は伊是名出身の前田清）のトムヌイとして従事していたが，1941年頃漁労責任者の前田正太郎（清の弟）が網組をやめたのを契機に独立して網組を組織し，和泊を根拠地にして操業を始めている。網組規模は，サバニ５隻，漁夫24－25人で，漁場，漁期などは，前述した吉田組とほぼ同じく，和泊町沿岸域を中心に各漁場を回り，周年，ムロアジ，スズメダイ，トビウオなどを対象にしてアゲヤーと「ムロ追込網」とを併営している[21]。この奥組は，戦時体制の強化にともない沖永良部島に駐屯していた軍隊の食糧調達を命ぜられ，網組責任者の奥内村は，敗戦直前の1945年８月にダイナマイト漁で事故死し，網組は消滅している。

つぎに向井組については網組責任者の向井富隆[22]は糸満の「保才小組」の組織する網組で３年間追込網漁を「研修」した後，1934年沖永良部島へ移住し，トーミシンカの漁夫，玉栄組，奥組のトムヌイなどを経て，1942年頃に独立，網組を組織している。網組規模は，サバニ３－４隻，漁夫17－18人で，網組構成員はその大部分が与論島麦屋の出身者で編成されていた。漁場は島内一円で，スズメダイ，ムロアジなどを主対象に９月から５月にかけて操業し，６－８月には網組を解散して一本釣り，採貝など個別漁業に従事している。しかし，この向井組については，始業後間もなく戦争が激化し，1944年頃には網組は本格的な操業ができなくなっている。

ところで，この島の与論島出身糸満系漁民の組織する網組の漁獲物については，一般に網組責任者・トムヌイの妻を中心に網組に専属する５―10人程度の小売行商を行う糸満女性らにより販売された[23]。しかし，網組専属の行商人数は名瀬，古仁屋に比べて相対的に少ないばかりでなく，都市化・産業集中の程度に規定されて「問屋」組織など地元の水産物流通機構も未発達であり，加えて，分散的な集落立地にともなう市場の分散性と販売能率の低下によって，少し豊漁すると漁獲物の販売が困難になっている。こうした網組の通常販売能力を超えた漁獲量があった場合には，網組漁夫が２人１組で行商販売に従事するといった状況は，前述した与論島の場合と同様であるが，そのほかに，魚の塩水漬けやカマボコ（練製品）製造などによる加工・販売も行っている。また与論島の場合とは異なり，甘藷，米，味噌などとの物々交換がかなり多く，網組で消費しない米を除き必需的食料品の多くは，網組会計へ現物で納入し一定の評価を行い魚の買受代金として処理している[24]。各得意先へ売掛けとなっている魚の販売代金は，一般に農家に現金収入が入る製糖期や花ユリの球根収穫期に回収して回るが，売掛未収金もかなりの額にのぼり，それらは配当責任者・トムヌイ（通常かれらの妻は販売を担当）が，その責任を負い，かれらの配当金から差し引かれている。また，漁獲物の販売条件がきびしいことから，漁獲物は行商女性の買手市場となっており，責任者・トムヌイの妻を除く一般の行商女性については，彼女らが網組から買い入れる魚の量目の割増率[25]が多い網組に人気があり，そこへ移動・集中する傾向があったといわれる。そして，こうした市場条件による制約が，この島に定住する網組の統数とその規模を規定する重要な要因になっていたといえよう。

最後に，追込網漁業の生産関係に関わり「雇い子」と網組の収益分配について簡単にふれておく。まず，「雇い子」については，糸満の漁民が組織していた長屋組については明らか

ではないが，その系譜をひく吉田組では網組責任者が２人の「雇い子」（国頭，糸満出身）をおいており，またトーミシンカについても網組構成員24，５人中10人近くが「雇い子」であることからみて，基本的には「雇い子」労働力を基盤にした「親方制経営」であったと推断される。しかし，これを継承ないし新たに組織された与論島出身糸満系漁民の組織する網組については，すでに述べたような与論島独自の村落共同体を基盤にした農漁民労働力への転換・依存と労働力の地域・網組間移動が激化するなかで，時代的背景も加わり，「親方制経営」の変容・崩壊が進展していたことは明らかである。たとえば向井組の網組責任者は，奄美大島より２人の年雇（年間１人当たり30円の賃金）を雇い入れている。これは，従来小学校卒業から徴兵検査までの長期の年季とその間に追込網（アゲヤー）を中核にした糸満漁業技術を修得させるといった徒弟制度的関係を基盤にした「雇い子」制度が変質しつつあった証左であろう。そこでは徒弟制度の変容．崩壊と労働力の雇用的側面に重点をおいた，より近代的な雇用関係を基盤にした追込網漁業経営への展開の萌芽も認められ，「共同体的経営」の与論島の網組とはやや異なった性格を示しているのである。

つぎに網組の収益金・代分けについても，与論島出身糸満系漁民には特徴がみられる。それは，追込網漁業の種類・袋網のサイズなどにより代分けに差異が認められ，かなりきめ細かな経営管理を配慮していることである。たとえば，追込網漁業の周年操業を行う吉田組では，それが戦前期に確立していたかどうか必ずしも明確ではないが，漁期が１－４月，５－８月，９－12月の３期に分かれ，年３回（正月，５月，８月）の配当計算を行っており，一般に「親方」の技能的技術の主要な表象とみられる袋網に対する代分けは，漁獲対象魚種・網規模により代数が2.5人－1.0人前の幾段階かに区分けされている。これは，追込網の周年操業による漁期の延長とそれに関連して形成されたとみられる主要対象魚や漁具・漁法を異にする漁期別・時期別操業方法など技術的条件に起因するだけでなく，「親方制経営」の変質とも深い関わりをもっているといえよう。とはいえ，この沖永良部島においても，第２次大戦の激化にともない，追込網操業の困難や統制経済の強化による経済活動の制約などにより，ほとんどの網組が，1943,4年以降，休業・解散してしまうのである。

３）徳之島

徳之島における追込網（アゲヤー）の創業の経緯についても，必ずしも明確ではないが，明治40年（1907）頃，糸満の大城兄弟が山部落に移住して操業を始めたカマスー組（大城組）が，この島に定着して追込網漁を行うようになった最初の網組である。この網組は，多数の兄弟を中核にした血縁関係でその組織を固め，網組を二分して操業可能なほどの強大な勢力をもち，明治末期から昭和初期の20年近く徳之島全島の追込漁場をほとんど独占的に利用してきたといっても過言ではない。したがって，昭和初期に新規参入して来る与論島出身糸満系漁民の組織した永井組，奥村組の場合には，この網組との間で他の島にはみられないきびしい対抗関係におかれている。また，大正末期，糸満より徳之島に移住し，松原を根拠地にして操業を始める宮城組（(中ン屋組）の場合も，カマスー組との競合を回避して，トビウオ網を中心にした操業を行っている。ともあれ，昭和初期以降カマスー組と与論の２つの網組とは対抗関係を強めながらも，太平洋戦争の勃発による戦時体制に完全に組み込まれるまで拮抗した形で併存することになっている。ここではこれら４つの追込網組について，その沿革，網組の組織・規模，操業状況，変遷などを概括しておく。

まず，カマスー組についてみれば，始業した明治末期から大正期にかけての網組の実態は必ずしも明らかではないが，全盛期（大正初期―昭和初期頃）には大城兄弟を中心に約20人の糸満漁民と約50人の「雇い子」よりなる一大漁労集団を形成し，徳之島全島の追込網漁場を独占的に利用していた[26]。網組は，島の北東から北西部の山，湾屋，平土野などを根拠にして操業していた西方（イリカタ）と，島の南東から南西部の亀津，面縄，鹿浦などを拠点にして操業していた南方（フエーホウ）の２組に分けられており[27]，それぞれサバニ５隻，漁夫34－35人の網組規模のものであった。各網組の労働力編成は，５人のトムヌイとかれらが夫々雇用する４－５人の「雇い子」および若干の独立漁夫よりなる。漁夫の主体は国頭出身者で，与論島出身者は少なかった。漁期は10－５月で，旧５月４日のハーレーにはトムヌイなど糸満出身の漁民は一時帰郷した。しかし，追込漁期以外も島に留まり，各トムヌイを中心にその家族や「雇い子」労働力によるツノマル（テンジクハギ），エラブチ（ブダイ），カタカシ（ヒメジ）などを主対象にした小型の追込網漁や釣り・はえなわ，採貝など個別漁業を行っている。漁獲物の販売は，通常トムヌイの妻のほかに４－５人の糸満女性などが加わり，総勢10人程度の行商の女性によって担われていたが，彼女らだけで販売できない場合には，網組の漁夫らも，帰漁後，２人１組で魚を担ぎ行商に出かけている。奄美諸島の中で大島本島に次ぐ広さをもつ徳之島の場合，都市化・人口集中による産業集積は大島本島に比べて著しく低く，大小の農村集落の広域的な分散・点在と相まって，漁獲物の販売条件は極めてきびしかったとみられる。前述のようにカマスー組が網組を分割し地域的に棲み分けて操業を行った大きな理由も，こうしたきびしい市場条件に対する対応策であったといえよう。ところで，２つの網組に分割操業していたこのカマスー組は１年おきに操業漁場を交代するとともに，各網組の年間経営成績を比較・対比して競争による網組組織の活性化を図るなどして経営の活力を維持してきた。しかし，昭和初期にいたり移住一世の高齢化が進行するなかで，1930年代に入り新規参入した与論島出身糸満系漁民の網組との競争が激化し，高齢化したカマスーの引退・帰郷と網組責任者・トムヌイの交代・若返りなどの促進により網組の再編を進め，戦時体制の下に組み込まれていく。軍への魚の納入を行っていたカマスー組も，第２次大戦の激化により操業が困難となって，1943，４年には網組は自然消滅してしまう。

つぎに宮城３兄弟[28]によって組織された中ン屋組についてみれば，この網組もその沿革は定かではないが，1920年代には松原を根拠にトビウオ網を行っていたとみられる。網組責任者は宮城三良（サンダースーまたはワロンメーと呼ばれる）であり，網組規模は，トビウオ追込網の場合，サバニ６－７隻，漁夫40人前後で，漁期は５－７月である。網組労働力は，宮城３兄弟とかれらが雇用する国頭などからの「雇い子」10人程度のほか大半が地元松原部落の青年に依存していた。この中ン屋組は，トビウオ追込網の漁期以外は３－５月にヒカグヮ（スズメダイ）を主対象にした追込網（サバニ３隻，漁夫10－20人），10－２月にトビウオ流し網，７－９月にイカ釣りを行っており，利用漁場との関係で夏場（５－９月）は松原，冬場は面縄，亀津を根拠地にして操業している。また追込網漁では３兄弟を中心に網組編成を行うが，流し網，イカ釣りでは，各兄弟がそれぞれの「雇い子」とともに個別に操業を行っている。なお，漁獲物の販売については割愛するが，トビウオの場合は，鮮魚向け販売のほかに釣り・はえなわの餌料魚としても使用されており，また松原部落では塩干加工も行われるなど農漁家の自給食料としての性格も強かったといえよう[29]。ところで，この中ン屋組

については，網組の変遷・消滅についても必ずしも明らかではないが，太平洋戦争の勃発と戦時体制の強化にともない，労働力基盤が急速に崩壊することによって網組の操業が困難となり，1942年頃[30]には網組が消滅してしまう。

さて，以上述べた糸満の漁民による網組に対して，与論島出身糸満系漁民が組織する2組の網組が1930年頃に新すく参入して来る。奥村組と永井組がそれである。このうち永井組については戦前の網組の実態はあまり明らかではないが[31]，奥村組についてはかなり明確である。そこで，ここでは奥村組について網組の概要とその変遷を簡単にみておこう。

奥村組は，与論島麦屋出身の幾村菊（1939年奥村に改性）[32]によって組織された網組であり，始業当初は与論島を根拠地にして沖永良部島，徳之島へ季節通漁を行っていたとみられる。それが，徳之島平土野へ移住し，そこを主要基地にして操業を始めるようになる時期や経過については必ずしも明確ではないが，網組の最盛期であった1930年代中頃には，網組規模はサバニ6隻，漁夫40人程度である。しかし，この網組はカマスー組との漁場や市場をめぐる競争が激化し，対抗関係も強まった[33]ことから網組を二分している。すなわち1つは奥村村菊を漁労責任者として亀津を根拠地にその周辺の漁場でタカサゴ，スズメダイを対象にしたアゲヤーの網組であり，いま1つは堀江岸里を漁労責任者にして主にスズメダイを対象にして全島を回り操業する網組である。網組規模は，前者がサバニ4隻，漁夫24－25人，後者がサバニ2－3隻，漁夫15－16人である。網組労働力はすべて与論島出身者で編成されている。漁労従事者40人のうち「雇い子」経験者は5－6人だけで，あとは与論島の網組に従事していたもので，ほとんど1人前（40人で総代数37,8人代）の漁夫で構成されていた。また，漁獲物の販売については，通常トムヌイの妻と地元女性を合わせて総数10数人の行商女性が担当しており，漁獲量が多く彼女らで間に合わぬ時には網組漁夫が参加することは，他の網組と同様である。この島についても市場条件はきびしく，漁獲物が行商女性の買手市場であっただけではなく，売掛金の回収には網組に集金係をおいてその回収にあたっている。しかし，遠隔地販売による売掛未集金の増加や農産物との物々交換による網組食料費の割高などにより網組の配当はあまりよくなく，網組編成が行われる旧正月には，毎年漁夫の半数近くが入れ替わったといわれる。ところで，この奥村組も戦時体制の強化にともない網組の存立は困難となり，第2次大戦末期の1945年には網組責任者の村菊が空襲によって死亡し，網組は消滅してしまう。

さて，以上で戦前の奄美南部三島における追込網漁業について，各島嶼ごとの網組の実態とその変遷を概括することによって，その全容を明らかにした。戦前期の奄美諸島には糸満からの季節的に「旅魚」を行う移動型の網組もかなり存在しており，それにともなう糸満の漁民の流動性が高いことに加え，昭和初期に入り与論島出身の糸満系漁民が組織する網組の与論島を基点にした奄美南部三島における激しい流動的な操業と網組の消長などに起因して，なお若干不明な点は残すが，その大要は明確になったといえよう。そこで，つぎに，これら戦前の網組と直接・間接に関わりをもって展開する戦後の追込網漁業の変遷を，簡単に要約しておこう。

2．戦後期

戦後の奄美南部三島の追込網漁業は，これら島嶼のおかれた社会経済条件の激変により激しい変貌をとげることになる。とくに，戦後，これら三島を含む奄美諸島の追込網漁業に重

大な影響を及ぼした社会経済的要因には，敗戦後の北緯30度以南の島嶼の米軍政統治による「本土」との行政分離，その後の奄美「本土復帰」にともなう沖縄との行政分離，さらに「本土復帰」後の復興・振興事業等による公共投融資の激増とそれにもとづく水産行政の推進や，高度経済成長の進展にともなう激しい労働力の島外流出と島内における産業別労動力の再編成の進行などがあげられる。そして，こうした社会経済的条件の変容は，島嶼の農漁村社会や地域経済を根底から揺り動かし，奄美南部三島の追込網漁業を性格づけていた「親方制経営」や「共同体的経営」の存立基盤は急激に変容・崩壊し，追込網漁業の再編成が進むのである。

ところで，南部三島における戦後の追込網漁業再編の特徴をみれば，第1に糸満の漁民による網組の消滅により与論島出身糸満系漁民の網組への交替・移行が完結すること，第2に島外出漁をしていた大型の追込網組が衰退・崩壊し，比較的小規模な島内自給を目的にしていた網組が存続することがあげられる。たとえば，明治末期から昭和初期にかけ徳之島全島の追込網漁場と市場とをほぼ掌中に収めて絶大な勢力を誇っていたカマスー組の崩壊と，沖縄の大型追込網組に伍して沖の島など「本土」漁場への出漁によって著名になっていた若松組の衰退は，そのことを端的に示すものである。また，戦前から戦後にかけては，敗戦後の社会混乱やきびしい食糧難の中で戦前の網組責任者の戦禍による死亡や高齢化による世代交代などによって，新旧の網組の代替にともなう追込網漁業の再編成も併進しているのである。

戦後の南部三島の追込網組については，敗戦後の社会経済的混乱の中で小規模な網組を組織し，短期的に操業したものもあり，若干不明な点は残すが，主要な網組とその概要は，表2のとおりである。これら網組の戦後の変遷の特徴を島嶼別にごく簡単に概説すれば，次のとおりである。まず，南部三島の追込網漁業労働力の最大の母村であった与論島についてはどうか。この島では，戦前期には漁場や市場の競合しない「島外出漁型」と「島内操業型」という2形態の網組の併存により多数の網組が共存していたが，戦前期島内操業を主体にしていた網組はほとんど復活せず，小規模な「島内操業型」の2組の網組が誕生するにもかかわらず，網組数は減少している。戦後，「本土」との行政分離により「島外出漁型」の大型網組の地元還流などが進み，島内での漁場や市場をめぐる競争が激化したのが一因とみられる。戦後の追込網組は，「本土復帰」後，社会経済条件が激化する中で網組規模の縮小，操業期間の短縮などを図り再編成を進めるが，戦前期の漁業生産力水準を揚棄できず，1960年代中頃にはそのほとんどが解散してしまう[34]。戦後操業を開始した残存する2統の小規模な網組も，1970年代には消滅し，戦前・戦後の追込網組は全く姿を消すことになる。つぎに沖永良部島については，奥組が西春里（与論島麦屋出身で奥組のトムヌイ）により継承されており，網組数は戦時中と同じ3組が復活する。しかし向井組は，「本土復帰」の頃に労働力の調達が困難となり網組を解散するのをはじめ，残った2組についても，吉田組が1967年頃，また，1962，3年頃にトムヌイの藤田菊宜見（現在幸助と改名）に漁労責任者の地位を譲った西組の場合も，1970年頃には解散し，この島の戦前・戦後の追込網組も全く姿を消している。さらに，徳之島については戦後，食糧難を背景に小規模な数組の網組が誕生しているが，それらは短期間で姿を消し基本的には戦前から継続する永井組のほか，カマスー組の再編によって誕生した大城組，奥村組を継承した平土野組合の3組が網組の主体をなす。しかし，これらの網組は，他の二島より早く消滅してしまうのである。

表2　戦後の奄美南部三島の追込網組

島名	網組名	存続期間	網組規模	出身地		漁場－水揚地	備考
				責任者	漁夫		
与論島	永岡組	1946～1951頃	漁夫17,8～20人 サバニ2～3隻	茶花	島内	島内一円－{茶花 古里	
	若松組	1947～1965頃	漁夫 30～35人 サバニ5～6隻	麦屋 東区	同上	種子・屋久 トカラ列島 {名瀬 各島	
	坂元組	1934, 5～1942, 3	漁夫 30～40人 サバニ5～6隻	古里	同上	トカラ列島－名瀬 与論－古里，茶花	
	杉組	1946, 7～1965頃	漁夫 20人程度 サバニ 4隻	麦屋 東区	同上	沖永良部－和泊 徳之島－亀津 奄美大島－名瀬	与論島を主要基地にする
	菊組	1946～1978	漁夫17,8～20人 サバニ2～3隻	麦屋 東区	同上	島内一円－{茶花 古里 麦屋	若松組より杉峯中と一緒に分離，その後杉組より独立
	納山組	1947～1972	漁夫 30人以下 サバニ1～3隻	麦屋	同上	島内一円－{茶花 古里 麦屋	
沖永良部島	吉田組	1946～1967	漁夫 17～18人 サバニ3～4隻	与論 (立長)	与論	島内一円－{和泊 伊延 小米	
	向井組	1946～1953頃	漁夫 12～13人 サバニ 2隻	与論 (立長)	同上	同上	
	西組	1947, 8～1970頃	漁夫17,8～20人 サバニ4～5隻	与論 (麦屋)	同上	同上	奥組を継承
徳之島	大城組 (カマスー組)	1948～1963頃	漁夫 20～23人 サバニ 4隻	糸満 二世	与論 沖縄	島内一円 －島内各地	
	永井組	1946～1965	漁夫 18～20人 サバニ 4隻	与論 (麦屋)	与論 糸満	島の南東部～南西部}－{亀津 面縄 鹿浦	
	伊藤組 (平土野組合)	1946～1968頃	漁夫 12～13人 サバニ 4隻	与論 (麦屋)	与論	島内一円 －島内各地	奥村組を継承
	堀江組	1948頃～1952, 3	漁夫 10人程度 サバニ2～3隻	与論 (麦屋)	与論	島の東部～南部}{母間 亀津	伊藤組より独立
	金城組	1948, 9～1950頃	漁夫 12～13人 サバニ 2隻	沖縄 (港川)	徳之島 沖縄	島の南東部～南部}－亀津	山，古仁屋，亀津の網組を経て独立

(注) 1．聞取り調査による。
2．網組規模は1948，9年当時のものである。

さて，以上述べたように，奄美南部三島の戦前・戦後の追込網組は，高度経済成長が終焉する1970年代半ば頃にほとんど消滅してしまっている。これは，戦前期に確立された追込網漁業の生産関係とそれを支えていた生産力が，戦後，これら島嶼地域における社会経済環境の激変にともない，崩壊していったことを示すものである。そして，こうした糸満漁業を支える最大の柱であった追込網漁業の衰退・崩壊にともない，その副業として営まれていた個別漁業，とりわけ瀬魚一本釣り漁業への転換が1970年頃から本格的に進展することになるのである。

Ⅳ　結びにかえて

奄美南部三島における戦前・戦後の追込網漁業の特徴と変遷を，網組を構成する主体的条件に重点をおき，各島嶼別に網組の実態と消長を通して明確にした。最後に，これら三島の追込網漁業の現状について簡単にふれ，結びにかえる。南部三島には，現在各島に1組ずつの追込網組がある。与論島の児玉組合，沖永良部島の山下組合，徳之島の椛(かば)山組合が，それである[35]（表3参照）。これら現存する追込網漁業を特徴的にみれば，まず第1に高能率省力化漁業への変質，第2に個別漁業等の比重増加による操業期間の短縮，第3に共同経営的性格と配分の平等化などがあげられる。現在の網組は，2トン前後の動力漁船2－3隻，労働力6－9人，アクアラング6－7台で編成されており，利用漁場の広域化，高能率化により労働生産性の向上が著しく，かつての労働集約的な追込網漁業とは技術体系を異にしている。操業期間は網組によって若干異なるがスズメダイ，タカサゴ，トビウオの盛漁期にあたる12－5月頃までで，その他の時期には，個別に瀬魚一本釣り漁業とともに，小規模な追込網漁（ブダイなどを対象）などを行っている。観光地化の著しい与論島では，夏期（7－8月）には網組の責任者は観光客相手の潜水技術指導などを行うマリーン・スポーツの営業に従事している。瀬魚一本釣り漁業の発展や小営業の併営などにともない，追込網漁業の操業期間は短縮化，効率化しており，最も操業期間の長い山下組合では，年間操業日数が200日を超えているが椛山組合では100日余り，児玉組合では50日程度である。また，収益配分は，

表3　奄美南部三島の追込網組の現状

島名	網組名	始業年次	網組規模	出身地		漁場－水揚地	備考
				責任者	従事者		
与論島	児玉組合	1965	動力漁船2隻 労働力6～9人 潜水器5～7台	麦屋	麦屋 主体	島内一円－{与論町漁協 市場	1975年頃より現在の網組編成となる。漁獲量の多い時は那覇へコンテナー出荷
沖永良部島	山下組合	1973	動力漁船3隻 労働力6～7人 潜水器6台	与論 (麦屋)	与論 主体	島内一円－{沖永良部 漁協市場	1981年網組責任者死亡により息子が網組継承
徳之島	椛山組合	1973,4	動力漁船3隻 労働力7～8人 潜水器5台	与論 (麦屋)	与論 主体	島内一円－{島内各漁協 市場主体	1975年頃より現在の網組編成

（注）1．聞取り調査および大島支庁「漁業許可申請敷網（追込網）」（1983年）による。
　　2．網組規模等は，1987年の聞取り時点のもの。

基本的には大仲歩合制にもとづく代分け制に依存しているが，生産手段（資本）に対する分配比率が低下し，その共有化などにより共同経営的性格を強めている。たとえば，児玉組合では各船主の持寄りによる動力漁船は，1隻当たり0.5人前（燃料費は大仲経費負担），袋網，袖網（タテ網）は合わせて1人前，アクアラング用ボンベ（10－20本）1人前，労働力は各1人前である。また，椛山組合でも漁船は0.4人前，袋網0.7人前，タテ網0.35人前，ボンベ使用者0.5人で，漁船を除く生産手段を含めた網組員一人当たりの代数は，最高の網組責任者が1.7人前，最低のタテ網所有者の1.35人前（一般に1.5人前）となっている。このように労働分配への比率が相対的に高まり，各網組員の分配格差は，戦後の網組より一段と縮小しているのである。追込網漁業の厳しい内外環境に対して，各網組の現実的な対応がすすみ，経営の合理化，近代化が図られてきたのである。現存する追込網漁業は，叙上のような漁業技術の改善や経営の近代化によって網組の再編整備を進め今日に至っているが，地域漁業全体をめぐる社会経済条件が一段ときびしさを増すなかで，資源問題，労働力問題，市場問題などの山積する課題をかかえ，新たな再編成を迫られているといえよう。

文献および注

1) 沖縄諸島に近接する奄美南部三島では，奄美大島ほど沖縄との違和感がなく，経済圏，生活圏として那覇との結びつきが強い。たとえば，戦前，与論島最大の追込網組であった若松組では，「本土」出漁の場合に網組構成員の必要とする物品の注文をとり，買出人を人選して那覇・糸満などで一括購入したといわれる。また現在，漁獲物の島外出荷についても，ブダイなどは価格が相対的に高く，距離的にも近い那覇市場へ出荷している。

2) 比嘉政夫は，糸満の漁民の出稼ぎは琉球列島の南部域（宮古，八重山）から始まり，のちに同列島の北部域（奄美地方からさらにその以北）へと進展して行ったことを指摘している。しかし，『沖縄県水産一斑』には，漁業の盛んな本部浦の浜元，渡久地両部落に居住する50－60人の専業漁民は，すでに，1830－1840年頃の糸満または那覇からの移住者の子孫であることが指摘されており，島伝いに容易に行ける奄美諸島南部の島嶼は，かなり早期から沖縄本島の中西部に根拠地をおき，釣り・はえなわ漁業などを行っていた糸満の漁民の活動範囲に包摂されていたとみられる。中楯興編著『日本における海洋民の総合研究―糸満系漁民を中心として―　上巻』（九州大学出版会，1987年）355ページ，大村八十八「沖縄県水産一斑」1912年11月整理，『沖縄県農林水産行政史第17巻　水産業資料編Ⅰ』（1983年）22ページ所収。

3) 琉球王朝時代，中国貿易船などの水夫役を担当していた久高島民は，「琉球処分」の影響をうけ，明治8年（1875）以降，中国貿易が断絶したことにより漁業に転身し，北は奄美諸島から南は台湾にいたるまで広域的に漁業出稼ぎを行うようになっている。奄美諸島にはエラブウナギ，ウミガメなどをもとめて出漁している。久高島民がエラブウナギをもとめて奄美に出漁していたことは「南島雑話」にも記述されており，かれらの漁業出稼ぎの歴史も藩政期まで逆のぼるとみられる。前掲「沖縄県水産一斑」20ページ，および名越佐源太「南島雑話」『日本庶民生活史料集成　第1巻』（1968年）97ページ，第60図参照。

4) 釣り・はえなわ，潜水魚などを行う糸満の漁民が，早くから奄美諸島を主要漁場の1つとして活動していたことは，すでに1898年（明治31）の「琉球新報」の記事でも明らかであるが，追込網（アゲヤー）を主体にした出漁については，必ずしも明確ではない。1902年（明治35）9月始め台風により漁村糸満では，イカ釣りなどに出漁していた200隻近いサバニとそれに従事していた400人近い漁民が遭難するという大惨事に見舞われており，アゲヤー技術の開発状況や「雇い子」形成の経緯などとの関連でみて，この事件が，糸満の漁民をして，釣り・はえなわからアゲヤーへ漁業の重点を移す契機となったのではないかとみられる。1908年頃（明治40年代）以降，明らかにアゲヤーの網組によるとみられる奄美への出漁記事が散見されるようになるのである。『糸満市史

資料編１　近代新聞資料』（1982年）参照。

5) 中楯興編著『日本における海洋民の総合研究―糸満系漁民を中心として―上・下巻』（九州大学出版会，1987年，1989年）。

6) たとえば，大正末期頃の徳之島では，糸満女性による行商の労働条件は，古仁屋に比べて著しく劣悪であったことが報告されている。前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』347－348ページ。

7) 農漁結合した農漁家の労働力を基盤とする与論島の島内操業型の追込網の場合は，他の島嶼などで一般化していた漁獲物と農産物などとの物々交換は行われていない。現金販売（掛売りも含む）できなかった漁獲物は，一般に網組構成員へ現物配当の形で分配し，配当計算の際に現物給として代分けに加えられている。これは，網組労働力が島内の農漁家労働力の「通勤者」によって編成されており，網組自体として食糧の調達が必要なかったのと，一方，漁獲物そのものが農漁家にとって家計を支える食用として重要な役割を果たしていたためである。与論島における戦後の追込網組の漁獲物販売などの実態については，松本幹雄「与論島の漁業」九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美―自然と文化―論文編』（1959年）115－116ページにも詳述されている。

8) 明治期，近代社会への移行と日本資本主義の発展にともない，窮状化した辺境離島の与論島民は，1900年前後より島ぐるみで集団移住などを開始しており，同島の「雇い子」の歴史もその頃に始まるとみられる。なお，明治31年（1898）の台風災害による飢饉を契機に，三池炭坑の底辺労働者として長崎県口ノ津に集団移住した与論島民の実態と歴史は，森崎和江・川西到『与論島を出た民の歴史』（たいまつ社，1971年）に記述されている。

9) 糸満から与論島へ短期間通漁して来る追込網組は，徳田組が組織された大正中期頃まで存在していたといわれ，網組名，網組の実態などは全く不明であるが，漁獲物を販売する糸満女性を４―５人位は連れてきたことが指摘されている（1902年茶花生まれ　南文治談）。「雇い子」などをもとめて糸満などから来島するのは，昭和初期まで続いたとみられるが，この点についても定かではない。残された課題である。

10) 徳田組の成立した経緯も明らかでないが，立長出身の徳田沢業が「雇い子」の年季明け後に帰島して組織した与論島出身糸満系漁民の最初の網組といわれる。徳田沢業の生年月日は1885年（明治18）９月４日（除籍簿によるが，一般に聞取りによる生年月日より数年遅れて入籍されている場合が多い）で，与論島では最も早期の「雇い子」のグループに入るとみられる。網組規模は，スズメダイ（ヒキ）を主対象にしたサバニ２隻程度，漁夫17，８－20人の小型のものであった（茶花在住　南文治談）。その他の網組について，その責任者をあげれば，永岡玉置（1902年生），亀国澄（1895－1952），里見村（1898－1965），若松内渡美（ウチト）（1908－1983），山下富温（1895－1952），坂元原吉（1909－1971），杉峯中（ミネチユウ）（1908年生）の８人である。生年月日等は，生存者以外は戸籍簿による。ただし，坂元原吉については，息子よりの聞取りによる（戸籍簿では1910年生）。

11) 与論島では「本追込（ホンオイコミ）」ともいわれ，スズメダイなどを主対象にした「ヒキ網」と区別されている。なお，松本幹雄「与論島の漁業」で，戦後古里部落の追込網組（坂元組と推察される）の営む網漁法の種類として「上げ網，飛魚網，引き網，ゆうがま網等」に区別されているが，内容的にみて「上げ網」はアゲヤー，「引き網」はヒキ網であろう。また，同論文でこれら追込網組が，「復帰後」に漁業組合として成立し，「内地」の漁業組合と内容的には異なるが，制度的にはかなり一致していることが指摘されている。しかし，追込網組（「組合」と称される場合が多い）は制度的にも「漁業組合」とは異質のものであり，事実とは異なる。前掲「与論島の漁業」109－113ページ参照。

12) 運搬船は沖の島の若宮丸，大和丸（２隻）のほか，尼崎，佐伯，臼杵，八幡浜などでチャーターし，通常２－４隻使用したといわれる（与論町　若松北川談）。

13) 沖の島では，鵜来島，弘瀬島，母島の３つの漁業組合に対し，それぞれ入漁料を支払っている。入漁料は，当初（1932，３年頃），３組合合わせて５百数十円程度であったが，1930年代後半には３千円を超えたといわれる。その他の漁場の入漁料は，聞取りでは明確ではなかった。また隠岐島については，漁期が遅く短い（６月半ば頃より約２ヵ月間）ため，沖の島または薩南諸島北部で操業しながら，漁の様子を聞いて４回ほど出漁したという。五島，北陸への出漁は１回だけで，いずれも失敗に終わっている。さらに漁獲物の出荷市場についてみれば，主要漁場であった高知，愛媛での操業では，広島，呉（いずれも問屋へ），大阪の市場への活魚出荷を中心に，京都，和歌

山などへも出荷している。また，隠岐島出漁では，松江，米子に出荷し，薩南諸島の北部漁場を利用する場合は，鹿児島，名瀬などへ水揚げしている。

14) 本人は，潜水魚などによりほとんど耳が聞こえず，筆談であったため詳細な点は聞き出せなかったが，兄２人とは異なり「糸満売り」ではなかった。八重山では，カツオ船のほか，その餌料魚をとるモジ網などを所有して複合的に漁業を営む「クラマ」という会社に雇用された（毎月40円の「月給」をきちんと支払ってくれた）という。与論島でサバニを使用してカツオ釣りを行った先駆者であるが，「本土」のカツオ釣り技術を取り入れた沖縄のカツオ釣り漁船との漁場競合などにより，技術として定着はしなかったといわれる（茶花在住　永岡玉置談）。

15) 若松組が分離した大城組は「四国ニンジュ」と呼ばれ，網組責任者は屋号（亀上世利事（カミウイシイクイ））の大城亀で，かれは，桜田勝徳『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』『桜田勝徳著作集　第４巻　離島と山村の民俗』1981年，19－58ページ所収）の話者の「大城カメ」と同一人物である。亀の四国出漁の契機，入漁経過などについては，上田不二夫「高知県・沖の島における廻高網漁業（戦前期）」（前掲『日本における海洋民の総合研究　下巻』所収）を参照。

16) 長屋組，トーミシンカについては，すでに述べた「科研費」の研究成果報告の後，トーミシンカを実質的に組織した金城治造氏（1908年生）の聞取り調査にもとづき加筆・訂正した。

17) 長屋組については，『和泊町誌　民俗編』（1984年）228－229ページにかなり詳しい記述があるが，網組の変遷などについては，一部間違っている。また，前掲『日本における海洋民の総合研究上巻』372－373ページでも，網組責任者と漁労責任者の混同にもとづく網組変遷の時期的間違いがみられる。

18) トーミシンカについては，網組責任者の金城三良（1891年生）の父加那が素封家で，追込漁技術の秀れていた金城治造の腕を見込んで三良を新しく組織する網組のトムヌイにする条件で資金を貸付けてできた網組である。したがって，漁労面なども含む網組の実権は治造（童名は次郎で「ジロアッピー」と呼ばれる）が保持していたとみられる。治造は，その後借入金の返済などをすませ，1935，６年に新しく網組（「ユーザンメニンジュ」）を組織し，トーミシンカは消滅する。

19) 吉田富松は1908年与論島立長生まれで，数え年14歳（1921）に「雇い子」として親方大城亀助（屋号ハマウナシー）のところで５年間，イカ釣り，採貝，パンタタカーなどに従事，年季明け後の1928年頃，短期間沖永良部へ来島したのが最初である。その後，伊平屋や糸満出身の漁民が組織した沖縄諸島を中心に操業していた追込網組でアゲヤーやムロ追込網を本格的に修業し，玉栄組が独立する直前の1937年頃に再度沖永良部へ来島・定住することになる。玉栄組の網組責任者である玉栄栄富は，富松の叔父にあたり，６歳年長（1902年生）で，身体が丈夫でなかったため責任者となって３年間操業しただけで網組をやめ商売をし，1944年には与論島へ引き揚げている。玉栄栄富がサンダースーよりいくらで網組を譲渡されたのかは不明であるが，その３－４年後に富松は栄富から，網，サバニ等を総額１千円で譲り受けている（和泊町　吉田富松談）。なお，吉田富松については，前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』369－370ページ，372－373ページに記述があるが，若干，事実と異なる点があることは，前述のとおりである。

20) ムロアジの漁場は周辺に点在していたが，とくに好漁場となっていたのは，島の北西部に位置する沖泊と田皆岬の付近であり，漁期の４－５月には各網組とも漁場近くの沿岸に１ヵ月位小屋がけをして泊り込みで操業している。とくに，田皆岬付近の「待網」漁場は，田皆部落の代表の沖元隆より玉栄栄富が，漁期中の漁獲高の３割を漁場料として支払う条件で借用していた（前掲，吉田富松談）。なお，沖元隆は鹿児島県会議員などをやる地元の有力者で，1937年沖永良部島へ最初に動力船を導入した人でもある。前掲『和泊町史　民俗編』236ページ。

21) 漁期は，11－５月がスズメダイ，ムロアジ，６－７月トビウオ，８－11月雑魚の３つの時期に分けられ，各期の終わりに配当計算を行った（与論島古里　納山行則談）

22) 向井富隆は，1915年与論島立長生まれで，数え年16歳で３年間糸満へ追込網漁の「研修」に行っており，「雇い子」ではない。妻は，没落した「ミーウナシ」の末娘で，親の反対を押し切って結婚したといわれる（向井富隆・ハル談）。なお，向井富隆および向井組については，前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』370，373－375ページ参照。

23) 吉田組，向井組の網組責任者の妻は，いずれも魚行商などに従事していた糸満出身の女性であり，彼女らが両網組の漁獲物販売に重要な役割を果たしたとみられる。

24) 物々交換した米については，それを一旦島内で販売し，その代金をもって組合から買受けした魚

の代金を精算している（前掲，向井ハル談）。

25) 魚の買受け数量に対する割増率は，通常２－３割程度である。一人１日当たりの行商販売量は，一般に20－40斤（12－24kg）で，行商の女性らは10斤当たり２，３斤多くの魚を貰い，数日後に網組の定めた相場で基本買受け数量の魚の分だけ網組会計との間で精算していた。

26) 大城兄弟の徳之島への移住経緯は，必ずしも明確ではないが，かれらが組織したカマスー組は，奄美諸島で操業した糸満漁民の追込網（アゲヤー）の中でも初期のグループの１つとみられる。大城７兄弟のうち，徳之島の山部落に移住して追込網漁に従事したのは次の６人である。長男大城亀（兼久のカミスー），次男喜三郎（ミーガニクの大サブロースー），３男栄三（小三良ウンメー），４男兼吉（ウシウンメー）長女の夫，上原亀（カマスー），次女の夫金城亀助（メンカニクのカミスー）。かれらは同時に来島したのではなく，網組責任者の上原亀，長男の大城亀らの第１陣が，明治40年（1907）頃山部落へ移住して来て追込網漁を始め，その後大正初期にかけて漸次兄弟の数を増やし，強大な勢力になったと推定される。網組責任者の上原亀は，1935年頃，高齢化して帰郷し，網組は，次男の喜三郎が継承する。昭和初期以降，世代交代も進み，兄弟の２世が網組漁夫として参加して来る。大城秀次（喜三郎の次男），同栄市（栄三の長男でサンドサンドと呼ばれ，戦後網組の責任者となる），同兼次（兼吉の次男），金城亀市（金城亀助の長男）らが，そうである。大城家は兼久原門中で金城亀助も同一門中であるが，上原亀は前中大殿内（メーカーヤー）門中である。徳之島町山在住の金城亀市（1923年生），大城兼次（1913年生）および糸満市役所勤務金城善の３氏よりの聞取りと前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』358―360ページより推断した。ただし，同書中の大城栄一は，上記の大城栄市と同一人物であり，栄一は誤り。

27) 大城兼次の聞取りでは，西方，南方の２組の網組は，さらにそれぞれが２班に分かれ，総数で４組の網組となり，漁夫は総勢80－100人規模であった。前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』344ページ。なお，堀江喜美植によれば，1930年代後半，カマスー組には亀津，山，平土野に根拠地をおく３組の網組があり，漁夫総数は80－90人であったという。いずれにしろ，大規模な漁労集団をいくつかの網組に分割し，徳之島全島の漁場の合理的利用と漁獲物の適切な販売体制を整えていたといえよう。

28) 宮城３兄弟は，長男三郎（生年不詳，ウースと呼ばれる），次男三良（1901年生，サンダースー），３男亀（1913年生，ウンチュー）であり，彼らは松原部落内の一角に上，中，下の位置に分かれ戸を構えていた。網組の責任者は家族連れで移住していた中程の位置に住む次男の三良であり，そのため，「中ン屋組」といわれた。松原では戦前期に血縁地縁関係を基盤にして組織された宝土組など３組の地元漁民のトビウオ追込網があり，農閑期の５－７月に部落民を動員して操業しており，中ン屋組がその技術伝播に多大の貢献をしたとみられる（前述した「科研費」の研究成果報告後，三良の６女　宮城初枝氏に聞取りを行い一部加筆・訂正を行った）。

29) 中ン屋組の大正末期から昭和初期にかけてのトビウオを中心にした漁獲物の実態については，前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』347－348ページ参照。

30) 前掲，磯野源内談。

31) 永井組は，1904年（与論町「除籍簿」では1906年）麦屋地区で生まれた永井民兼（タミカネスー）が，「雇い子」の年季明け後，数年して組織した網組である。妻ジル（旧姓金城）は糸満出身で彼女の兄なども亀津に居住していたことから，網組の編成は，与論島出身の糸満系漁民と糸満の漁民との混成の網組であったとみられる。なお，前掲『日本における海洋民の総合研究　上巻』347ページの長井組は，永井組の間違い。

32) 与論町の「除籍簿」による。

33) 年次は不明であるが，カマスー組との漁場紛争が裁判問題となり，奥村村菊が，島の西海岸域の与名間―犬田布岬間，永井民兼が東海岸域の井之川―本川間の漁場の入漁契約を各部落の区長らと交わしていたため，奥村組，永井組が勝訴したといわれており，それを契機にカマスー組と与論島出身糸満系漁民との力関係に変化が生じたとみられる（天城町　堀江喜美植，椛山喜美信談）。奥村組の網組責任者，村菊もその頃にはすでに平土野へ定住していたと推察される。

34) 与論島最大の網組であった若松組は，戦後若松２兄弟（内渡美，北川）を中心に再興されるが，奄美と「本土」との行政分離による漁場制約や，その後，「本土復帰」前後から労働力の流動化・減少が激しくなり，「本土復帰」頃に網組の再編を進めており，内渡美は，1954年に与論島民らとともに屋久島への農業開拓入植へ加わり，同島へ移住し，網組は弟の北川が責任者となって，

1960年頃まで続いている。屋久島に移住した内渡美は，その後漁業へ転身，すでに1936年この島に移住し漁業に従事していた弟内中らとともに，安房を拠点に漁業活動を行い，屋久町漁協長なども務めている。また，若松組から分離し，薩南諸島で広域的に操業していた杉組の責任者峯中も，1970年代後半，徳之島の農業パイロット事業へ息子らと参加，徳之島へ移住する。なお，片岡千賀之「高知県・沖の島における廻高網漁業（戦後期）」前掲『日本における海洋民の総合研究　下巻』所収によれば，1965年（昭和40）に内渡美は沖の島弘瀬漁協に入漁しているが，詳細は不明である。

35) 大島支庁「漁業許可申請（第7条）敷網（追込網）」(1983年）によれば，奄美南部三島の追込網漁業許可は9件（徳之島町1，天城町2，沖永良部島4，与論町2）となっているが，その多くは，一本釣り，刺網（磯建網），潜水器漁などを主業にする漁業者が，時化などのときに臨時的に操業するために申請したもので，すでに述べてきた追込網漁業とはかなり性格が異なる。現地調査によれば，ここで掲げた3組のみである。これら網組の責任者は，児玉栄次（1932年生），山下富直（1936－1986年，本人死亡により息子安富が網組を継承），桃山喜美信（1927年生）で，かれらは，いずれも，戦前・戦後の網組を体験し，当初は戦前型の網組で始業，いく度かの網組再編によって，今日にいたっている。